

# ESSAY いたずら

倉元 信行

22

1 0 0 年

私の家族にどれだけの歴史があるのかと年数を計算してみたのは一昨年のことだった。披露宴で新婦側を代表してのスピーチを頼まれ、月並みな誉め言葉では面白くも無いし、じゃあ“家族ノート”のことも話してみようかと思いついた時のことである。

結婚して22年経ったところだから、二人合わせて44年の歴史がある。これに3人の娘の年齢をそれぞれ足してみると丁度100年であった。

結婚した時から始めて家族に累計で100年、実に一世紀の歴史があることになる。

家族5人の毎週の出来事を刻んだこの“家族ノート”は10年続けているから延べ50年の歴史に相当する。この20冊の大学ノートは、私たち家族のこれまでの歴史のうしろ半分を記録していたことになるのだ。

スピーチで話したこのノートのことを少し詳しく書いてみる。

どういっけなかったのかは覚えていない。一番下の娘が小学校に入って字が書けるようになっていた事もあるだろう。

最初のページに引っ越したばかりの家の食堂の、みんなの座席を決めた絵があるから、これをノートに書いた時に思い付いたのかも知れない。

言い出したのは私だった。毎週日曜日の夕食後に、その週にあった各人のトピックスを書こうと提案したのである。

ノートは開いて右側のページだけに書き込む。一番上に日付と、右スミにはその日の夕食の献立を。次に数行、この一週間の家族全体の出来事だとか、世の中の大きな事件だとかを。

それから、その下に各人が自分に起こった出来事や、思った

ことを書き込むのである。誰かが代表でみんなが言うのを書くこともあれば、それぞれ自分で記入することもある。大体数行ずつで済む。

左側のページは、演奏会などの催しものの切符とか、旅行の時の写真、新聞の切り抜きなどを貼ったりする自由空間としておく。

表紙の裏には、B5の封筒を斜めに切ったものを貼り付け、なんでもポケットとして利用する。

週に一回わずか20分ほどの時間は、家族のコミュニケーションと貴重な記録を生み出した。

毎日であればすくいいやになり止めていただろう。月一回なら思い出すことが出来ない。一週間はほどよい刻みだった。

これをめくると子供たちの成長の様子や家族の動きが手に取るように分かる。字の書き方の変化まで。また、いつ何があったか調べたい時には実に便利である。

この披露宴のスピーチでは、私たち家族に100年の歴史があることと、その半分の記録したこのノートのことを実物を開いて説明し、新しいカップルが今ゼロ年から始まる自分たちの歴史を、できれば子供を二人以上育てて、100年、150年と

積み重ねていってほしいと話して私の挨拶とした。

この時の新婦M子さんは、私の職場でそれからもしばらくの間勤めを続けたのだが、ある日、実は家族ノートをつけ始めたんですと、打ち明けてくれた。

このノートは今も続いている。小さい頃からの習慣になっているので子供たちも抵抗が無いのであろう。でも男の子だったら続いていたのだろうか。

記録と言えば私のつけている“生涯日記”も面白い過去の記録の仕方である。

十何年か前にボストン美術館で手に入れたこの日記には曜日が無いので、その日に何があったかを年号と共に書き込むことが出来る。がっちりした体裁でのもので、どこを開いてもこの美術館所蔵の絵がちらびめられている。

これに私は家族全員の誕生日や自分たちの両親などのことも含めて、色々な出来事を年号と共に記入している。

例えば、ピカソのエッチングが載っている頁の10月24日には次の3行がある。

倉元信行、誕生日(1946)

母(晶子)交通事故で危篤(1962)

フルラス賞授賞式、サンフランシスコ・シエラトンで(1988)、  
というように。

あのローマングラスを買った時、一生のお宝を買ったのだからこの日、1月18日のところに忘れず記入しておかなくてはと、セザンヌの自画像のあるこの頁を開いた。そして丁度30年前のこの日に、私たちの家族があつた火事で焼け出されていた事に気づいたのである。

